

平和の経済学

——「^{ディープ・ピース}くずれぬ平和」を支える社会経済システムの探求——

藤 岡 惇

「人の世のあるかぎり、くずれぬ平和、平和を返せ」

(峠 三吉『原爆詩集』より)

「経済のない道徳は寝言である

しかし道徳のない経済は犯罪である」 (二宮尊徳)¹⁾

1. はじめに

「核の時代」の平和

中東の石油資源への支配権を再建するために、アメリカのブッシュ政権は、宇宙の覇権的支配をテコとして「テロリズムとその支援国家の絶滅めざす²⁾グローバルウォー地球戦争」を開始した。これに対抗して「自爆テロ」が激化し、民間人や子どもまで巻き込みつつある。憎悪と暴力の悪循環がさらに進むと、世界に350基ある原子炉や原子力施設さえ攻撃目標とされる時が来るであろう。日本海を囲む日本・韓国には、すでに60基を越える原子炉が操業している。チェルノブイリ級を越える大型炉が多いのが特徴だ。放射性物質をまきちらす放射能兵器、さらには核兵器の使われる日が来るかもしれない。

「原子エネルギーの解放は、すべてのものを変えてしまったが、われわれの考え方だけは旧来のままだ。ここに危機の根源がある」と A. アインシュタインは嘆いたが、この事態は、なお続いている。50年前の1955年——無限の破壊力をもつ水素爆弾の開発を目撃して、英国の優れた数学者にして哲学者である

B. ラッセルが、アインシュタインとともに共同声明で警告したように、「核の時代」——戦争が人類を滅ぼすか、人類が戦争を滅ぼすか以外の中間的選択肢が消えていく時代に、われわれは生きているのだ。

広島で被爆した峠 三吉は、自死の直前に「人の世のあるかぎり、くずれぬ平和、平和を返せ」とうたったが、「核の時代」の真実をリアルに見すえたばあい「くずれぬ平和」を作り出す以外に、人類生き残りの道はないといっても過言ではない。

「平和」とは何だろうか。「国家間で戦争をしていない状態」——これが常識的な答えであろう。しかしたとえ国境線は平穏であっても、金儲けのために次の戦争の準備をしているような国、あるいは国民の間で相手国への復讐心が渦巻いている社会では、「くずれぬ平和」が確立されたとはいえない。「戦争がないからといって、平和とはいえない。泣いてなくても、心から笑ってなければ幸せじゃないのと同じでしょ」——被爆2世の女子学生の語った、この言葉を記憶にとどめておきたい。³⁾

平和な国際関係とは樹木のようなものである。人間活動の多様な領域——すなわち①大地・地球に根をおろし（地球との平和）、②社会・コミュニティに根をおろし（地球のうえの平和）、③個人の心身へも根をおろし（個人の平和）、これら三様の深い根によって安定的に支えられたときに「健康な社会」が形成され、「くずれぬ平和」（ディープ・ピース）が建設されていくのであろう。

暴力とは何か

個々人には、人間の本来性に根ざした肉体的精神的発達の可能性が備わっている。ある時代・ある社会の文明や生産力の水準にもとづけば、ここまでは実現できるという一定の水準があるはずだとノールウェイ出身の平和学者のヨハン・ガルトゥングはいう。その際、なんらかの人為的な妨害が働いて、この可能性の実現が妨げられたばあい、そこに暴力が存在するとみるべきだ。「暴力とは、潜在的なるものと現実との、可能であったものと現にあるものとの格差の原因」なのだ、と。

暴力には3つの形態があるとガルトゥングは続ける。第1に「直接的暴力」——軍事力を使った戦争やテロリズムのばあい。このばあい意図的な殺傷がおこなわれるので、加害者を特定しやすいが、戦時の栄養失調や原爆被爆のばあいのように、慢性的な症状を呈しつつ早死にいたることもある。

第2は、「構造的暴力」——政治力や経済力を使った抑圧や搾取の結果、意図しない殺傷が行われるケース（たとえば平均余命が75歳の社会で、40歳で過労死したケースや公害病のばあいなど）。いわば社会構造に組み込まれた暴力（発達障害の発生）であるために加害者は特定しにくい。

第3は、「文化的暴力」——上の直接的暴力・構造的暴力を正当化する宗教や芸術・科学の働きのことである。⁴⁾

直接的暴力であれ、構造的ないし文化的暴力であれ、理不尽な暴力というものは、被害者とその遺族に「怒り」のエネルギーを蓄積し、加害者の側には復讐されるのではないかという「恐れ」を蓄積していく。「怒り」と「恐れ」の悪循環がある臨界点をこえたとき、戦争がぼっ発するのであろう。

国家間や社会集団の間で見解が異なり、論争が生じるのは避けられない。しかし意見の対立があっても、脅すことで相手を無理やり屈従させようとはしない社会、非暴力的な手法を用いて紛争をコントロールし、紛争レベルを低めていける社会、このような「免疫力や自己治癒能力の高い健康な社会」が「ディープ・ピースな社会」なのである。

「人間の安全保障」の提唱

敵国が侵攻してきても、その侵略を撃退できる軍事力を整備しておくこと——これが、古いタイプの平和維持論の核心であった。国家をアクターとする軍事的安全保障こそが、平和を維持する基軸だというわけである。しかしこの「理論」によっては、2つの世界大戦の勃発^{ぼっぱつ}を阻止できなかった。そこで国際連合が設立され、日本国憲法が制定された。国連の設立文書を引くかたちで日本国憲法は、その前文で「全世界の国民がひとしく恐怖と欠乏から免かれ、平和のうちに生存する権利を有することを確認する」と謳^{うた}った。圧政の「恐怖」

を心配しなくてもよいし(民主化)、「欠乏」を心配しなくてもよい状況(経済繁栄)を築くことこそが、くずれぬ平和の基礎となるという革新的な平和思想が、ここには脈打っていた。

この考えをひきつぐかたちで、「国境線偏重の安全保障から国内の全住民を重視した安全保障」に、「軍備による安全保障から『持続可能な人間開発』による安全保障」に転換し、民衆個々人の「人間の安全保障」を増進させる必要があるという提言を1994年に国連・開発計画局が発表した⁵⁾。その背景には、①人間を不安に陥れる多くの非軍事的な問題が生まれており、これらの解決ぬきには、平和はありえなくなったこと、②国家の安全だけでなく、国民が安心して生活できる条件をつくることこそが、「免疫力や自己治療能力の高い健康な社会」を建設し、くずれぬ平和を支える土台を固めることができるという考えがあった。世界の平和学者と活動家の作り上げてきたアイデアが、このようなかたちで国連文書に反映されるようになったのである。「人間の安全保障」重視の考え方は、1995年にデンマークで開かれた社会開発サミットの基調報告に盛り込まれ、その推進役を日本の小淵恵三首相(当時)が買ってでるまでになった⁶⁾。

人間発達の経済的基盤を問うことの大切さ

これまでマルクス経済学系の文献では、変革主体の形成(人間発達)の必然性は、経済学の理論からは説きえないので、経済理論からは切り離すべきだという主張(主体形成の主観主義=宇野弘蔵氏の理論)と、資本主義のもたらす貧困化は必然的に変革主体の形成をもたらすという主張(主体形成の客観主義=正統派)に分かれていた。ただし後者のばあいも、ロシアや中国の革命をモデル視する傾向が強く、生活の窮乏化が、即、革命をもたらすといった「窮乏化革命」論を唱えるだけの論者が多かった。軍隊的な組織原理に準じて革命政党を建設したことともかかわって、階級や民族は問題にするが、個々人の人間的発達をどう保障するかといったテーマを論じることができない経済学者も多かった。

これにたいして私たちは、第二次世界大戦後の「修正帝国主義＝修正資本主義」というシステムのもとでは、資本主義の下にあっても人間発達のがかりが一定の範囲で生まれるものだとみた⁷⁾。主体形成についての先の主観主義と客観主義の見解については、ともに視野を生産力と経済の枠内に限定したために生まれたあだ花であり、一面的な見解だと考えた。主体形成を論ずるばあい、視野を工場法や政治・文化の領域にまで拡張する必要がある、どのような質の民主主義、どのような質の生産力があるばあいに、主体形成＝人間発達を促進しやすいのかを具体的に探究すべきだと、私たちは提唱した⁸⁾。この点は、経済学を前進させる積極的な貢献であった。

ただし今日の時点からふりかえてみると、なおいくつかの弱点を残していたように思われる。最大の問題点は、人間発達を問題にしなが、近代の主流派経済学的前提する人間観を批判し、これを乗り越えようとする作業が十分ではなかったことである。周知のように近代経済学は、人間をエコロジ的な土台や社会・歴史の枠組みから切り離し、類（人類・生物）と累（祖先と子孫）から孤立した「近代個人モデル」という枠組みのなかで捉えようとする。そのために、大地・自然が人間を生み出し、「いのち」（身体）が精神（自我）を生み出しているのに、あたかも人間のほうが大地・自然を所有し、精神（自我）のほうが「いのち」（身体）を所有しているかのように考えてしまう。このような近代個人モデルを前提とする経済学では、かつての天動説のように「自我」を軸として宇宙が回っているかのように錯覚したり、経済的損得の刺激だけに反応するという「経済人」モデルが成立するかのように想定してしまうのであるが、このような人間観にたいする批判が十分ではなかった。そのために「大地と宇宙に根を下ろす」なかで「小我」から「深我」・「大我」へと向かい、「自己実現」から「自己超越」へと向かう人間発達の大道が見えにくくなっていた⁹⁾。

マハトマ・ガンジーは、ジョン・ラスキンの『この最後の者にも』との出会いを、彼の人生観を転換させた決定的事件として回顧しているが、ラスキンは、この著作のなかで次のように書いている。「いかなる人間の行為も損得の原理ではなく、正邪の原理にもとづいてなされるべきである…… [損得勘定にもと

づく] 経済原理がはびこるならば、国民的破滅がもたらされるだろう」¹⁰⁾と。このラスキン＝ガンジーの視点を受け継ぎ、いっそう発展させる必要があることは間違いない。

しかし他方、貧しい人になればなるほど、日々の生活で精一杯であり、損得勘定をはなれた行動をとりにくい。「正邪の判断基準」にもとづいて行動しても生存権が保障される仕組みを整えておかないかぎり、貧しい人の心を動かすことはできない。「徳が得につながる」経済システムを用意しておかないと、江戸時代の「生類あわれみの令」の悲劇をくりかえすだけであろう。

本稿では、これらの点に留意しつつ、①どうすれば個人のなかに宿った「小我」が「深我」をへて「大我」に成長し、「平和の担い手」へと発達できるのか、②そのような人間発達を支える社会経済システムとはいかなるものであるのか、という2つの問題を考えてみたいと思う。

2. 「人間」とは何か、なぜ尊いのか

「海より広いものがある それは空
空より広いものがある それは人の心」

(ヴィクトル・ユーゴ)

「……私たちが、[万物の霊長にふさわしい] 雅量をもつようになるとき、……『高貴な身分には義務が伴う』ことを片時も忘れない者のもつ威厳が回復されるでしょう。」

(E. F. シューマーハー 『スモール イズ ビューティフル』)

「いのち」とは何か、なぜ尊いのか

話は、137億年前といわれるビッグバン直後にとぶ。当時の宇宙には、もともと単純な元素——水素とヘリウムしか形成されていなかった。核融合を起こして、より複雑な元素をつくりだすためには、大変な高熱が必要だったからだと(水素爆弾の核融合反応に点火するには、原子爆弾の爆発熱が必要だったことを思い起

こしてほしい)。

軽いガスで出来た原始星は、内部で核融合反応をおこし、しだいに炭素・鉄といった重い元素を合成し、一生を終えるときに重い元素を含んだガスを放出する。このような固体元素が集まって、第2世代の重く大きな星が形成される。この種の星の最後は、すさまじい「超新星爆発」となるが、そのときに発生する異常な高熱のおかげで、鉄よりも重くて複雑な原子核をもつ元素（金や銀など）が生みだされた。わが身を犠牲にした星たちの大爆発——このすさまじい「宇宙の陣痛」のなかから、私たちの体を形づくる元素が生みだされた。じっさい私たちの体の元素組成比は、超新星爆発直後の元素の組成比とほぼ同じだといわれる。「君たちは、星の大爆発のおかげで産まれたのだよ¹¹⁾」と天文学者が説くには根拠があるのだ。

今から36億年近くまえ、地球の「原始の海」のなかに最初の生命体が現れた。私たちは胎児の時には、母親の子宮をみたす羊水のなかに浮かんでいるが、その羊水の成分は、じつは36億年前の「原始の海」の成分と同じだ¹²⁾という。生命体誕生から26億年の間は、細胞分裂という無性生殖が繁殖の唯一の方法であった。そこには個体の死は存在しなかった。細胞分裂にもとづく「永遠の生」を生物たちは満喫していた。およそ10億年前に多細胞生物が出現し、雄と雌とが互いのDNA（遺伝子コード）を交じり合わせ、子を産みだすという有性生殖が本格化し、そのときに個体の死が始まった。高等生物たちは、セックスの歓びを味わう代償として、死の恐怖を味わうようになったのである¹³⁾。

有性生殖の積み重ねのなかで、子孫に引き継がれるDNAは高度で複雑なものとなり、その最高の精華として人類が誕生する。生物の進化の歩みを手で表したばあい、その最先端の指先のところに「自然が自分自身の意識にまで到達している存在」たる「万物の霊長」=人間が生み出されたのである。

1人の人間のなかには75兆の細胞が活動し、癌細胞を例外として、すべての細胞が協力しあって人体の健康を創っている。心臓は、1日に8万回鼓動し、全長15.4万キロ——地球を4周する長さの血管に毎日2.4万リットルの血液を送り出している。よく生物学者は、「人間とは36億年のDNAだ¹⁴⁾」と述べるが、

1人の中に含まれるDNAの鎖の総延長は、1280億キロ——地球と太陽との間を400回往復する長さになる。私たち1人ひとりの「いのち」のなかに宇宙があるというか、宇宙進化の恩恵が凝縮されているのだ。¹⁵⁾

「いのち」は、なぜ尊いのだろうか。わけても人間の「いのち」は、なぜ尊いのか。75兆の細胞が1280億キロのDNAに導かれて精妙な協同活動を行い、自らの力で宇宙の最高の精華としての光を発しているからではないか。宇宙自体が自らの姿を捉えるために「宇宙の眼や耳」にあたる存在を、ついに創りだした——その「眼や耳」にあたる存在が私たちだからだ。私たち一人ひとりが、137億年の歳月をかけて、宇宙自身が腹を痛めて作りあげてきた最高の傑作であり、生きているだけで無条件に尊い存在なのだ。この真実を魂の深層で納得している人は、もはや兵士となって人を殺すことはできないだろう。¹⁶⁾

人類はひとつ

人類の遠い祖先は、500万年ほど前にアフリカの密林でサルと共通の祖先から分かれ、二本足で歩くようになった。現代人の共通の祖先は、16万—20万年前にアフリカから他地域にむけて「第2の拡散」を行い、多様な自然風土に適応するなかで身体的特徴を変えていった。したがって現代人は、共通の祖語（祖先の言語）をもち、遺伝学的に非常に似ている。生物学的には単一の人種に属しているといつてよい。しかし体の表面は気候環境の影響をうけやすいことから、肌の色や体型といった外形の姿は多様となっていった。

この本質は、自動車のばあいと同様ではないだろうか。たとえばトヨタのカローラを買ったとしよう。カローラという同一の車種に属していても、塗装の色によって、あるいは付属品の選択におうじて外形はさまざまに変貌するが、車の基本性能は、すべて同じだ。人間のばあいも、外形は異なるが、本質というか基本性能は同じである。人類というのは複数の人種からなっており、その違いによって人の能力・特質は左右されるという「人種主義」の考え方は、人間の本質を外形から判断する愚を犯している。¹⁷⁾

他方では、外形的な多様性、文化的な多様性の展開こそが高等生物の進化の

方向であり、多様なものの協力こそが、人類進歩の原動力であったことも忘れてはならない。同族殺しや人肉嗜食^{じんにくししょく}のタブー化が示すように、利他的に行動する能力、紛争を平和的に解決する能力を身につけたおかげで、人類は進化をとげ、生物界の食物連鎖の頂点に立つことができたわけである。

迷信や非合理主義の落とし穴

科学的社会主義の創始者の一人たるフリードリッヒ・エンゲルスは、このプロセスを説明して、つぎのように述べた。宇宙の物質進化は「自然がついに自分自身の意識にまで到達している存在」たる高等動物を生み出した。「物質がどんなに変転しても永久に物質でありつづけ、その属性のどの一つも失われることはありえない。またそれゆえ、物質系は、地球上でその最高の精華たる『思考する精神』を生み出した後に、消滅させてしまうこともあろうが、そのばあいでも、鉄の必然性をもって、この思考する精神をいずれかの場所、いずれかの時に再び生み出すにちがいない。」「われわれは肉と脳髓ごと自然のものであり……人間はますます自分が自然と一体であるということを感じようになる。」その結果、「あの精神と物質、人間と自然、魂と肉体との対立という不合理で反自然的な観念は、ますます不可能になっていくであろう」と。エンゲルスは、不毛な二元論を超えて、物質が精神を生み出し、自然が人間を生み出し、肉体が魂を生み出したことを認めよ、と説いたのである。

人工的に合成された元素を除くと、宇宙には、どこまでいっても水素からウランウムまでの92の元素とその組合せとしての分子以外の物質は存在しないし、光の速さよりも早く伝わる運動体も存在しない。死後の世界にも「霊」が残り、生きている人にたいして祟り^{たた}を及ぼすといったことは起こりようがない。かりに「超自然的な存在」が、宇宙の果てからメッセージを送ってきたとしても、137億年たたないかぎり、その意思は私たちに伝わりようがない。何か「霊的な存在」(神)が宇宙の外から私たちを操ることで、宇宙の進化発展が進んできたのではない。そうではなく、宇宙の物質系自体が、より複雑で個性的なものに進化発展するパワー、「自己組織化」するパワーを内包しているのだ。自¹⁹⁾

然主体的な唯物論,あるいは唯物論的な「アニミズム」(自然弁証法)にもとづく哲学を再興することは火急の課題である²⁰⁾。

全体と個の関係——雄波派か、雌波派か

わたしは、大学で「アメリカ経済論」や「平和の経済学」といった科目の講義をおこなっているが、「宇宙において人間(私)は、どのような位置を占め、どのような価値を有し、どのような義務(使命)を担った存在なのか」を考えてもらうことから、講義を始めることにしている。

ことは、まず受講生につぎの文章(『モリー先生の最終講義』の最後の一節)を提示した。「小さな雄波が砂浜の沖の大洋で、飛び上がり、飛び下がりしながら楽しんでいました。突然に雄波は、自分がやがて砂浜に砕け散るだろうと悟りました。この広い大洋のなかを、彼は今や砂浜めがけて進んでおり、まもなくそこでなくなるでしょう。『こりゃいかん、俺はどうなるんだ?』と雄波は渋い、暗い表情でつぶやきました。そこへ同じように、飛び上がり、飛び下がりしながら楽しんでいる雌波がやってきました。雌波が雄波に言いました。『なんでそんなにしょげているの?』雄波は『わかっちゃいないんだな。君はあの砂浜で砕け散って、おしまいになるんだよ』と答えました。すると雌波が、『あなたこそわかっちゃいないんだわ。あなたは波じゃないわ。大洋の一部よ』²¹⁾と言いました」。

この一節を読んで、「あなたは雌波派に近いですか、それとも雄波派に近いですか」という問題に解答してもらうのである。もとより、この種の問題には定まった正解があるわけではない。単一の答えに収束せず、どんどんと拡散していくので、死ぬ直前に、自己の「ライフヒストリー」を書くことで解答に変える以外にはないような問題なのだ。とはいえ一生をかけて正解を模索していく値打ちのある問題であることも確かだ。²²⁾ 解答にかける受講生の意気込みをみると、そのことがよく分かる。解答をみると「自分は今のところ雄波派だが、死ぬまでには視野を広げて雌波派に変わりたい」という希望を表明する学生が、最近は多い。

どちらかという男性には雄波派が多く、女性には雌波派が多いという傾向がある。なぜそうなるのか。「いのちを生み出す女性原理」の所産かどうかは判断を留保するとして、²³⁾ 社会的性差^{ジェンダー}が大きな役割を果たしていることは間違いないであろう。赤ん坊や子どもというのは、人間のなかでも一番自然に近い存在であるが、女性のばあい、このような「自然人」とつきあい、対話する機会を多くもつからである。

「人間のミレニアム」から「自然のミレニアム」へ

「雌波派のような人間観にたつと、全体が個に優先する全体主義的な社会を作ってしまうのではないか」という警戒心を表明する学生もいる。旧ソ連や北朝鮮型の全体主義的な社会体質^{へきえき}に辟易している人に多い意見である。

このような意見には、私はつぎのようにコメントする。雌波派には、じつは2つの異なるタイプがあり、両者を区別する必要があると述べて、まずは尊敬する友人——サティシュ・クマールの「3つのミレニアム（千年紀）論」を紹介するのだ。

サティシュは、若いころ、ジャイナ教の托鉢僧^{たくはつ}として、単身・徒歩・無一物で平和巡礼を行い、1万キロに及ぶ旅を介して米ソ首脳に核兵器を捨てるように説いてまわったインド人。その後英国南西部のデボンシャーの地に、美しいシューマツハ・カレッジを創った人²⁴⁾だ。1999年秋に彼は、立命館大学に来て、新しい千年紀の意味について次のように語ってくれた。

すなわち、キリスト誕生から最初の千年紀の間、とくに欧州では人間の生命と能力とは、全能の人格神に帰属しているとみなされていた。人間は、いわば外部の全能者にかしづく下僕となり、「神のミレニアム」といってよい千年間だった。

第2のミレニアムに入ると、「神の専制」への反発から人間復興運動がおこり、しだいに人間が神にとってかわるようになった。人間は自らを自然環境の外におき、自然を征服と支配の対象だと考えるようになった。その結果第2の千年紀は、しだいに「人間のミレニアム」という色彩を濃くしていき、自己

(自分の脳)を中心として世界が回っているという天動説的な観念論の考えに染まるようになった。自我のエゴ化と精神病理の蔓延^{まんえん}、核戦争、地球環境の危機が、その帰結であった。

第3のミレニアムの課題とは何か。あらゆる生命が輝かないかぎり人間の生命も輝けない世紀、万物の霊長にふさわしく「高貴なものには義務が宿る」^{ノ・ブレス・オブ・リージュ}という倫理に目覚め、地球環境全体をケアする義務を引き受ける世紀になることではないか。「神のミレニアム」と「人間のミレニアム」双方の弱点を止揚した「自然のミレニアム」への転換こそが望ましいのだ、²⁵⁾と。

「あなたいる、ゆえに我あり」への転換

2004年の1月に、インドのムンバイで開かれた第4回世界社会フォーラムに行ったとき、サティシュの新しい本をみつけた。『あなたいる、ゆえに我あり』(You are, Therefore I am)というタイトルの本だ。この本のなかで彼は、各ミレニアムに支配的となる人間観をあとづけ、持論をいっそう展開している。

「神のミレニアム」というのは、いわば「垂直型の雌波」の時代である。「あなたいる、ゆえに我あり」という人間観が支配的となるが、その際の「あなた」とは、全能の人格神ないし神に匹敵する独裁者だけ。わたし(我)との関係は、どうしてもトップ・ダウン型となる。「依存宣言」(declaration of dependence)の時代だといってよい。

第2の「人間のミレニアム」の時代というのは、雄波の時代だ。絶対的支配者からの「独立宣言」(declaration of independence)が発せられ、「我思う、ゆえに我あり」(I think, Therefore I am)原理を掲げるデ・カルト主義が王位に就く。人間が自然を支配し、人間の中では脳が身体を支配するという「唯脳論」(養老孟司)が猛威をふるい、人間(=個人脳)中心の天動説的な観念論が支配的な哲学となる。

それでは来るべき第3の「自然のミレニアム」にふさわしい人間観・自然観とは、いかなるものか。第2のミレニアムのなかで確立された個人的自立の条件をひきついで「水平型の雌波社会」,「あなたいる、ゆえに我あり」原理を高

次復活させる時代となるべきだと、サティシュは説く。第1のミレニアムの時代とは異なり、「あなた」は、もはや人格神や絶対的独裁者ではなく、人類・地球・自然を包括する「大自然と社会」全体に拡張される。その結果、わたしとあなたの関係は、水平的なものに変わっていく。「相互依存の宣言」(declaration of interdependence)の時代がやってくるのだ。²⁶⁾

「全体主義」社会に退化しないカギ——個人への生存権の無条件保障

それでは、ソ連や北朝鮮のような「奇怪な形相をもつ全体主義」社会はなぜ生まれたのか。第2の千年紀の「雄波社会」から離脱・超克しようとして無理な軍事的努力を重ねたために、第3の「水平型の雌波社会」に向かうことができなくなり、逆に第1の「垂直型の雌波社会」のほうに退行していったからだ——これが、この問いにたいする私なりの答えである。人間の尊厳を支える生存権を個人レベルで無条件に保障することが、個人の市民的自立の基盤を固め、このような退行を防ぎ、「水平型の雌波社会」にむけて人類社会を前進させていくカギであった。しかし現実には「スターリンや將軍さまへ無条件的忠誠」を誓う人にだけ、忠誠に対する恩恵＝特権として、生存権があたえられたからである。

生存権を無条件に保障するためには何が必要か。①生存のために最低限必要な貨幣所得を個人単位に無条件に保障する「市民所得保障制度」を創設し、市民的自立の基盤を強める、②個々人に再び「母なる大地」に回帰する権利を保障し、希望者には食料自給を可能にする「家庭菜園づくり」の権利を与える、というのが現時点でのわたしの解答である。自然と社会・祖先から受け取る無償の「愛のパワー」が先にあってこそ、人間の心身に感謝のエネルギーが生まれるのであり、報恩の念にもとづくボランティア活動に火が付くのであろう。またその結果、損得の経済原理の範囲を超えて、正邪の原理にもとづいて行動する人が増え、「市民」「文化人」「変革主体」という立場に立って行動する人が増えてくるのではないだろうか。²⁷⁾

3. 暴力と戦争の経済的根源

起点——自然を敬うこと 終点——自然を見習うこと
 廃棄物を発生させる唯一の種 それは人間である
 自然界にはほかに 不用なものを生み出す種などない
 （グンター・パウリ『アップサイジングの時代に』）
 時は流れているものを 刻むからこそ 無理がでる
 人は群れて育つものを 刻むからこそ 無理がでる
 人は「経済人」になれぬものを 強いるからこそ 無理がでる
 （BEGIN「竹富島で会いましょう」に補筆）

(1) マクロの視点で見ると

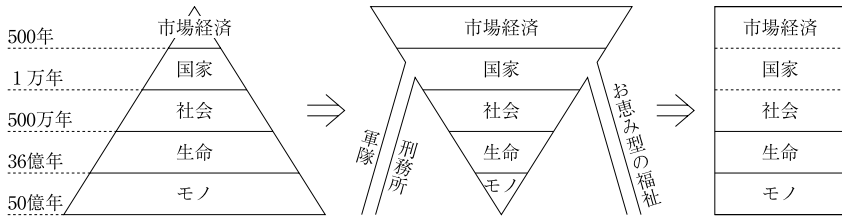
社会からの国家と市場経済の分離

36億年の進化の歴史のなかで、生物たちは生存持続のための^{おきて}掟を育んできた。「必要最小限という掟」と「調和・共生という掟」がそれぞれである。動物たちは互いに必要最小限の資源・獲物しかとらず、他の動物たちとの無用の争いを避けてきた。これが「自然の掟」（自然法）であった。

人間は、500万年ほど前に2本足歩行をするようになり、社会を形成するようになった。1万年ほど前の農業革命の時期に社会からの最初の大分裂が発生した。職業的な兵士と官僚が生まれ、国家・政治というものが生み出されたのである。戦争という組織的な殺戮戦を人類が始めたのは、たかだか1万年前にすぎない²⁸⁾。

500年ぐらい前に、社会から第二の大分裂が発生した。「モノづくりと流通」の領域（経済）が社会から分離し、「市場経済」という独自の論理で動く不可思議な魔物が生み出されたのである。脳（精神）が「いのち」をもっており、身体に宿る能力を所有しているという観念論の幻想に、人間は囚われるように

図一 モノ・生命・社会・国家・市場経済（資本主義）の捉え方



なり、自らを自然の外部に置き、自然法とは異なる「社会の掟」を作ることになった。「不必要最大限という掟」と「競争という掟」がそれである。まさに自然法とは正反対の内容であった。²⁹⁾

国家（政治）と市場（経済）が分離独立してしまった後の「社会」には、消費（人づくり）と余暇（学習・文化）の活動しか残らなかった。マネーを稼げない「影のような仕事」^{シャドウワーク}の場に、社会は変質し、格下げされた。以上のプロセスを図示したのが、図一の左側の三角形である。

こうしてパワーと資源は自然から社会へ、ついで国家と経済へと吸い上げられ、正三角形の型をしていた人間社会は中央部の逆三角形の型に変わっていった。このような逆三角形の型は肥大すればするほど不安定となり、グラグラしやすくなる。そこで国家による安定装置——軍隊と刑務所、および「お恵み型の福祉」という「つかえ棒」で支えることになった。

昔は、豊かな自然資源（自然資本）にたいして人工資本のほうが不足していたので、人工資本の拡充こそが経済発展を主導する要因であった。ところが今日では、人工資本、なかでも民間企業が持つ私的な人工資本はあり余るようになった。これにたいして「自然資本」（足元の土壌のなかに、どれほどの微生物、どれほどの数のミミズが³⁰⁾生きているか）や「社会関係資本」（地域社会や家族の協同能力の高さ）、あるいは物的な「社会資本」（道路や港湾施設、学校といった社会の共有する資本。インフラストラクチャーともいう）のほうが不足する時代となってきた。このような時代には、自然資本や社会関係資本・社会資本の整備拡充の³¹⁾ほうが、経済発展を主導する役割をはたすようになる。

このようなしだいで自然法と生命体のルールにしたがって、コミュニティ・都市・経済をどのように再設計したらよいか。市場価格に「エコロジー的な真実」を反映させるには、市場システムを修正しなければならないが、どうすればよいか。先の図を用いると、不自然な逆三角形を右側の長方形のような安定した形に変える課題に直面しているのだ。長方形型の社会が将来、持続可能で平和な共生型社会にむけて成熟していけば、市場経済や国家の自立性はしだいに薄れ、再び社会のなかに吸収されていくかもしれない(カール・ポランニ³²⁾イやマルクスが予言したこのような理論的可能性を考慮して、長方形型社会のなかで経済・国家・社会を分かち境界線を点線にしている)。

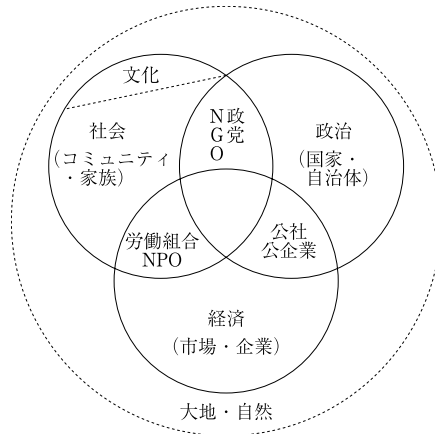
同様のことを沖縄の歌手で国会議員でもある喜納昌吉は、こう述べている。沖縄と新大陸の原住民が作ってきたのは、図一1の正三角形型の社会であった。正三角形型の社会に住む「沖縄とネイティブには自由がないが、平和がある。」これにたいして逆三角形型の社会を作ってきた「アメリカと日本には自由があるが、平和はない。私たちは、この溝を埋めていかねばならない」と。自由と平和を兼ね備えた長方形型の社会を、いかにして作りあげたらよいか——これが第3のミレニアムを迎えた新世紀の最重要課題の1つだといっても過言ではない。³³⁾

経済・政治・社会・自然の4領域の相関

これまで人間社会を歴史的な流れのなかで見てきたのであるが、この流れを現時点で固定し、人間生活はどのような活動領域から成り立っているかを観察してみよう。そうすると24時間の生の営みは、社会から分離独立した経済の領域(モノづくりと流通)、同じく社会から分離独立した「政治・軍事」の領域(モノと人の管理・防衛)、分離後に残った「社会・文化」の領域(消費と人づくり)、および人間活動の土台としての「大地・自然」領域(土地制度・土地利益のありかた)との関係からなっていることがわかるだろう。これら4領域の相互関係を描いてみたのが、次の図一2である。

第1の領域は、「経済」と呼ばれ、生産(モノづくり)と流通(消費者まで届け

図一 2 人間活動の4領域の相関



る活動)が任務となる。現代では市場と企業が主な担い手となり、利潤原理で動いている。「経済」の領域は、凶暴な自然をあいてにがぶりと組み合った「真剣勝負」の世界であり、相手の動きにあわせてこちらの動きも決まってくるという意味で、「必然性」が貫きやすい世界だ。試みに世界の民族博物館に行かれるとよい。どの民族も、生産のための農具や運搬手段など（さらにいうと武器）については、驚くほど似通ったものしか生みだせていない。真剣勝負の世界では、「遊び」や「空想」といった観念の自由な飛翔を許すゆとりに乏しい。経済の世界における人間行動は予測がつきやすく、数式で表わしやすいのはそのためだ。マルクスが人間活動のなかから特別に経済の世界を「社会の下部構造」（社会の土台）としてとりだし、そこに見出される生産力と生産関係との間の必然的な関連性の認識をてがかりにして、社会の科学的認識を深めようとしたのは、そのためであった。

第2の領域は、「政治」と呼ばれ、モノと人の管理・統治・防衛が任務となる。政府や自治体が担い手となり、計画中心の運営をし、「公共」原理で動いている。

「政治」と「経済」とが分離独立してしまった後の「社会」の領域には、消

費・ケア（人づくり）と余暇（学習・文化）の活動しか残らなかった。したがって「社会」領域は、マナーを稼げない「影^{シヤド}のような仕事^{ワーク}」の場に格下げされ、主として女性が担当するようになった。

ただし「社会」（人づくりと文化）領域では、「遊びの余地」が大きく、民族ごとにじつに多様・多彩な活動が展開されるのが特徴である。とくに真剣勝負の終わった後の余暇の時間帯に、自らの人生体験をふりかえり、自らの得た感動・教訓を同胞に伝達し、人びとを癒し元気づけようとする営みを「文化」と呼ぶ³⁴⁾。「社会」のなかでも、もっとも自由度・遊び度が高い領域である。

人間の活動を1台の自動車にたとえてみると、「経済」とは自動車のエンジン、「政治」はハンドル、「社会・文化」はブレーキにあたる。「大地・自然」は、さしずめ自動車を走らせる道路だといってよい。エンジン部分（狭い経済の領域）だけに視野を局限すると、自動車の全体的な姿も道路も見えなくなってしまうことに注意してほしい。

資本主義国のタイプの違い

経済、政治、社会・文化、大地・自然という4つの領域の組み合わせかたによって、同じ資本主義国といっても、そうとうの質のちがいが、タイプの違いが生まれてくる。たとえば、アメリカ型の資本主義のばあい、経済（市場）領域がもっとも強い影響力をもっている。閣僚たちは、経済界の代表が任命されることが多いし、政治の世界にも市場の論理が貫きがちとなる。また卒業後の生涯所得の視点から大学の質を評価するしくみが発達しているように、社会（人づくり）も経済の論理で左右されることが多い。

他方、日本や東アジア諸国のような「重商主義」ないし「開発主義」タイプの資本主義のばあい、国家と官僚機構が主導的な役割を果たしてきた。国家が強力な窓口指導と産業政策をとおして、経済領域を指揮し、支援することが多くなるし、検定教科書をとおして、人づくりの領域にも影響力をふるうことになる。

これにたいして、北欧型の資本主義のばあい、社会・文化領域が相当に自律

的な活動を展開し、他の領域のありかたに影響力を発揮してきたのが特徴だ。「社会・文化」部門が発展し、NPO・NGOの旺盛な活動を生み出し、国家権力と企業権力の暴走を、監視し、抑制する力を育ててきた。そのため同じ資本主義システムのもとでも、民主主義がかなりの程度、根付くことになる。国政選挙での投票率は、米国のばあいは3割から4割台にすぎないが、北欧諸国のばあいは、8割から9割に達することが普通となる。³⁵⁾

これとは別に、人間社会のありかたは、その社会が大地・自然とどのような関係を取り結んでいるかによっても大きく左右される。封建制度の解体過程で、どれほど徹底した土地革命が行われ、土地資産の民主的な再配分が行われたか。その結果、大地のなかに、どれほど大量の微生物とミミズが生息し、健康な動植物を育み、健康な心身をもつ住民を生み出しているのか。都市住民も、どの程度、家庭菜園を保有し、大地・自然との有機的な関係を保った生活を送っているか。——これらの指標いかんで、同じ資本主義システムのもとにあっても、社会関係の質（住民の健康度、社会関係の平和度）は大きな影響をうけるからである。

(2)ミクロの視点でみると

主流派経済学の前提する「人間像」の非現実性

「悠久の時空のなか、人は大地に生まれ、群れをなして育ち、大地に帰ってゆく」——これが「自然の掟」の定める人間像にほかならない。³⁶⁾これにたいして主流派経済学——新古典派経済学が想定する人間像（「経済人」ホモ・エコノミカス）というのは、つぎの3つの仮定にもとづく人工的な作品である。

第1に、手から指先を切断するように、人間を「類」（空間軸）と「累」（時間軸）のつながりから切りはなし、孤独な「個人」として取り扱うという仮定である。その結果、人間を「ビリヤードの球」（後述するB.ラッセルの言葉）のように孤立した実体だと想定することになる。

第2に、人間の孤独な意識（脳）のほうを、身体（いのち・能力）を自在に管

理・所有できる主体だとみなす。そのため、人間というのは、どのような行動をとるかを「決定」でき、その結果に「責任」をとれる主体だとアブリアリに前提される。しかし脳から心臓に「止まれ」という指示を送っても心臓は止まってくれないし、逆に心臓麻痺に襲われると、いくら脳から「止まるな」という指示を発しても心臓は止まってしまう。アフリカの貧しい難民キャンプの子どもに生まれるか、米国の大富豪の子どもに生まれるかを、子どもは自己決定できない。意識する前に、すでに身体が生まれていたからだ。「自己決定」でき、「自己責任」をとれる主体への成長を長期的な発達目標として掲げるのはよいが、これを前提条件にしてはならない。精神障害者の自立支援組織の実践が示すように、³⁷⁾自己決定・自己責任の能力を育むには、相応の条件と基盤——長期にわたるスローな支援のしくみが必要だからである。

第3の仮定は、この硬い球は、経済的刺激（損得勘定）にのみ「合理的に反応」という仮定だ。「自分だけ、今だけ、お金だけ」にしか関心がないという人間観では、なぜ自爆テロが敢行されるのか、なぜベトナム戦争でアメリカ軍が敗退したのかを説明することはできない。

しかし主流派エコノミストは、人間を「ビリヤードの球」のような孤独な「死に物」とみなし、ニュートン力学の数式を借用して、球の行方を計測しようとする。このような非現実的な人間観にもとづく経済予測が外れやすいのは当たりまえである。

人間ピラミッドを形成すると、どうなるか

人間とは「ビリヤードの球」のようなものであり、個人的な損得勘定で行動してよいのだと教えられて、子どもたちが「経済人」に「成長」し、人間ピラミッドを作るように指示されたとしよう。彼らは下積みofの労苦から逃れようと、体力にまかせて上の位置に移ろうと競いあい、いがみあう。その結果、弱いものが下に、強いものが上に、もっとも強いものが頂点にくるような人間ピラミッドが形成され、そこでいったん「市場均衡」が成立するだろう。底辺には女・子ども・老人や障害者、発展途上国の民衆が下積みにされ、最底辺に配置

された動植物たちは、もたえ苦しみ、「自然資本」と「社会資本」の劣化が進む。

このような均衡は不安定であり、一時的である。富と権力を吸い上げる過程が進み、ピラミッド上部のいっそうの肥大化と下部のいっそうの劣化が進むと、遅かれ早かれピラミッドが崩壊する日が来るであろう。崩壊の経済的表現が「恐慌」であり、政治的表現を「戦争」と呼ぶ。

4. 平和の担い手となるために個人でできること

「生きている人だけの世の中じゃないよ。生きている人の中に死んだ人もいっしょに生きているから、人間はやさしい気持ちをもつことができるのよ。ふうちゃん。」

（灰谷健次郎『太陽の子』）

「……近代科学の実証と求道者の実験とわれらの直観の一致に於いて論じたい。世界がぜんたい幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない。自我の意識は個人から集団・社会・宇宙と次第に進化する。……正しく強く生きるとは、銀河系を自らの中に意識してこれに応じていくことである。」

（宮沢賢治『農民芸術概論綱要』）

平和の担い手を育てるために

M・ガンジーが警告したように、「目には目を」を続けていくと、世界全体が盲目になり、破滅への道^{ぼくしん}を驀進するようになろう。しかし、もし「敵を愛する」ことができるならば、その瞬間にすべてのことは変わっていくだろう。そのようなことは可能なのだろうか。どうすれば可能となるのだろうか。

1947年のインド そこでは英国からの独立を目前にして、イスラム教徒とヒンズー教徒間の積年の怨念^{おんねん}が火を噴き、独立後の国のかたちをめぐって凄惨な内戦が始まった。いっさいの暴力の停止を求めて、ガンジーは単身で無期限の

断食に入った。ある日彼のもとに、イスラム教徒を殺したというヒンズー教徒の男が訪れ、殺人を犯した自分にも救いの道があるのかと問うた。ガンジーは、その男にこう答えたという。「救いの道がひとつだけあります。イスラム教徒の孤児をあなたの養子にするのです。ただしその子どもはイスラム教徒として育てねばなりません」と。敵の子どもを愛することができれば、すべてが変わる。子どもを本当に愛するとはその子の本来性を尊重することなのだと言ったとガンジーは説いたのである。³⁸⁾

2001年9月のニューヨーク そこでは凄惨な同時多発テロ事件が起きた。犠牲者の家族の一部は「平和な明日のための遺族の会」をつくった。アフガン・イラクの地を訪れ、米軍の攻撃の犠牲者遺族を弔問する旅、痛みと悲しみを分かちあい、憎悪と暴力の悪循環を克服する旅を彼らは続けている。³⁹⁾

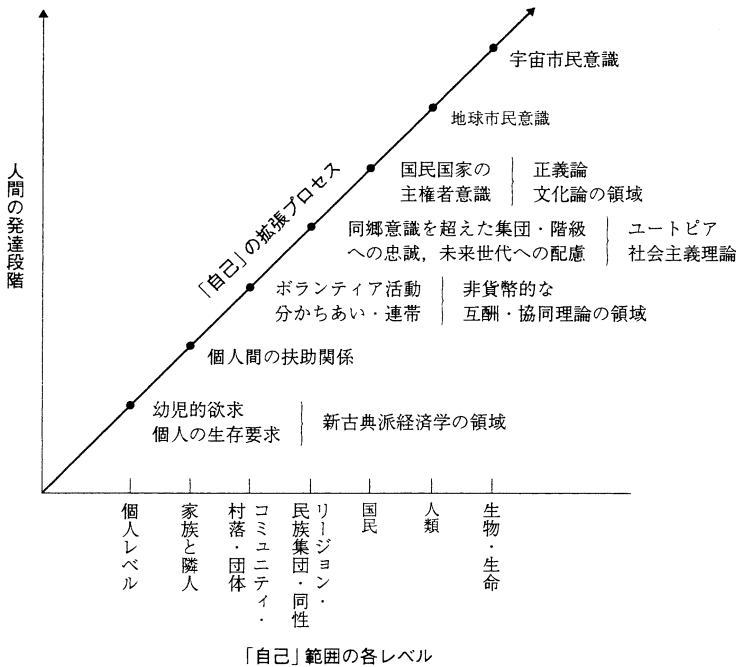
2005年3月10日朝の英国のエジンバラ 同市に置かれているスコットランド議会の前の道路に長さが10メートルもあるトライデントミサイルを発射する戦略原潜の模型が運び込まれた。この「原潜」には、15人が乗り組んでおり、自己の体を何重ものチェーンと鍵とで、大地と原潜の構造物とに固定した。スコットランド議会の若き女性議員のロウジ・ケインさんも乗組員となり、司令塔のハッチから演説をした。警察が出動し、原潜を解体するまで、道路の非暴力的な封鎖は、14時間も続くことになった。スコットランド議会の前で展開された、このユーモアあふれる運動は、劇的な効果を生み出したと、実行した市民平和団体の「トライデント・プラウシェア」は述べている。市民運動が要求してきた「トライデント原潜の解体」作業を、14時間もかけて、権力側が行ったという事態が、メッセージ性を高め、メディアも無視できなくなった。その結果、世の人々の注目と共感を獲得し、政府にたいする大きな圧力となったからである。⁴⁰⁾

このような人たちを育てていくには、どうしたらよいのだろうか。

(1) 2つの「自己実現」を区別する

ミヒヤエル・エンデの『モモ』という童話を読まれたことがあるだろうか。

図一 3 人間発達の視点からみた「自己」の拡張プロセス



出所：Hazel Henderson, *Building A Win-Win World*, 1995, p. 154 を一部改作。

「灰色の紳士たる時間どろぼう」と闘い、盗まれた時間を人間にとりかえしてくれた不思議な女の子——モモの物語だ。「灰色の紳士」とは、「経済人」を人格化したもの。同じ自己実現という言葉を使っても、「灰色の紳士」としての「自己実現」とモモにとっての「自己実現」とは、大きく異なる。前者にとっての実現すべき「自己」とは何か。それは、手（社会）と身体（自然）から切断された指先であり、「硬い球」にすぎず、いのちのない、中身のない「自己」である。したがってこのような「自己」を実現しようとする内発的なエネルギーは生まれてこない。他人（ボス）からの評価（裁き）と競争から脱落するという恐怖心だけが動力源となる。ビジネス書で説かれる「自己実現」とは、このような内容のない「自己」実現であることが多い。

これにたいしてモモのばあいの実現すべき「自己」とは何か。「自己」とは、指先のちっぽけな存在だとしても、手・身体・大地とつながった躍動する生命体の一部である。指先(自我)は身体と結びついており、身体は、土台としての家族と「バイオ・リージョン」(アイヌ語でいう「ウレシバ・モシリ」=すべての生物が育てあう大地・地球)に根ざしている⁴¹⁾。

モモのような生命力の豊かな子どものばあい、「自己」の範囲は、成長につれて自然と拡張していくものである。米国の未来学者のヘーゼル・ヘンダーソンの作成した次の図—3をみていただきたい。

赤ん坊から幼児の時代には、自己利益にかかわる「自己」の範囲は、文字通り本人一人だけだ。要求を貫くために、あたりかまわず泣き叫ぶ赤ん坊の姿を思い浮かべてほしい。通常の人**の**ばあい少年期になると、家族が「自己」利益の範囲に入ってくる。青年期になると、「自己」の範囲がコミュニティや企業団体まで広がってくる。成熟期に入ると、民族や国家まで「自己」の範囲に入り始める。さらに視野が広い人のばあいは、動植物や死んだ人、未来世代、地球の運命までが「自己」のなかに入ってくるだろう。「地球市民」から「宇宙市民」への「自己」の拡張を論じる彼女の議論は、「正しく強く生きるとは、銀河系を自らの中に意識してこれに応じていくことである」とうたう宮沢賢治の境地と通底している⁴²⁾。

これにたいして新古典派経済学というのは、幼年期の発達段階の自我(自我)に照応した経済学だと彼女は述べる。幼年期を超えて人間が「自己」を拡張し、発達をとげていく展望を閉ざしてしまうからである。

先に述べたように50年前にアインシュタインとともに、「核の時代における戦争廃絶の不可欠性」を訴えたB・ラッセルも、『幸福論』の末尾で「宇宙市民」への成長にふれて、こう書いている。「私たちが外部の人々や事物に本物の関心を寄せるようになると、自己とその他の世界との対立は、ことごとく消散する。そういう本物の関心を通して、人は、自己が生命の流れの一部であって、ビリヤードの球のような硬い孤立した実体ではない、ということを実感するようになる。……そのような人は、自分を宇宙の市民だと感じ、宇宙が差し

出すスペクタクルや宇宙が与える喜びを存分にエンジョイする。また自分のあとにくる子孫と自分は本当に別個な存在だと感じないので、死を思って悩むこともない。このように、生命の流れと深く本能的に結合しているところに、最も大きな歓喜が見出される⁴³⁾」と。

欲求の階層性という視点から自己実現の理論を深めた心理学者に、エイブラハム・マズローがいる。自己実現の欲求が満たされたのちには、人の欲求は、しぜんと自己超越（トランス・パーソナル）のレベルへ向かうとマズローは説いている。

このような「大我の人」を育てるには、どうしたらよいのだろうか。何を糧として、「小我」は「大我」に成長していくのだろうか。

(2)自然のなかで自己と向きあう——「深我」の獲得

大地とコミュニティから切り離され、根無し草となって大都会で孤立した生活をしていると、真実の自己に気づくチャンスが乏しくなる。平和の主体に成長していくために第一になすべきことは、自己と向きあう空間と時間——プライベートのための空間と余暇時間を確保することである。結婚後も夫婦は、自己の机、可能ならば「鍵のかかる個室」を確保し、瞑想する時間をもってほしい⁴⁴⁾。そのうえで自己の本来性に気づくために、自然のなかで自己と向きあう機会を増やすことが大切だ。なぜなら「私たちは、頭ではなく、身体で他の生物たちと……つながっている」からである⁴⁵⁾。

英文学者でタオイスト（道教思想家）の加島祥造さんは、つぎのように書いている。「町にいるときの私は、『料理された』ものなのだ。長いこと煮たり焼いたりされていて、『芯』のあたりだけがようやく^{なま}生で残っている」と。大都会のなかで、資本主義的な社会関係によって「料理された」自己を癒し、本来の「賢い体と丈夫な頭」を取り戻すには、どうしたらよいか。

まずは大地・自然に抱かれた深い自己（深我）を取り戻すことであろう。先に自己（小我）を「指先」として表現したが、自己の足元を深く掘り、自己が指全体と手の平によって支えられていることが自覚されてはじめて（深我の自

覚)、自己は、じつは手と腕・体の一部にすぎず、他の「指先」ともつながっていること、いいかえると私は地球の一部であり、すべてのいのちとつながっているという真実が自覚される(大我の自覚)からである。このように自己認識を深めていくには、まずは自然のなかにプライバシー空間をもつことが必要だとして、加島さんは、つぎのように続けている。「若いころには詩が少し書けた。……しかし壮年期には詩の泉がとまってしまい、20年が過ぎた。50の声を聞くころここに山小屋を持つようになり、この小屋で過ごす日々だけはまた詩が書けるようになった。伊那谷は潤れかけた私の詩の泉をよびもどしてくれた。」「ここにいることで、いま生きているという意識が鋭くなる。」そのことで「自分の頭の支配から自分の心身を解放するようになった。ありのままの自分を受け入れたときに、自然の中のいのちの流れに感応する力が戻ってきた。「するといわば、『むこうから現われる』かのように、新しい美の領域が見えてきた」⁴⁶⁾と。

なぜ自然のなかで自己と深く対話する場を持つことが必要なのか。人間とは社会的動物である前に自然的動物だからだと、画家の宮迫千鶴さんは述べる。「では土を忘れるとき、私たちの心身はどうなるのか。……土を忘れることによって、『いのち』が生から死へ、死から生へと循環しているものだという自然の原理を私たちは忘れてしまう。たとえば雑木林の落ち葉は、はらはらと落ちて土になり、その土は腐葉土として新しい植物を育てるように、私たちの死は新しい世代の生につながっていくのだが、その『いのちのつながり』が見えなくなると、……『自己の人生を満たされたものとして眺める』足場がわからなくなるだろう。私たち人間は、社会的動物であると同時に自然的動物でもあるが、この『自己の人生を満たされたものとして眺める』ためには、社会的であるだけでは充分ではなく、むしろどれほど、おのれの中に自然性を見つめたかということが重要になると私は思う。その自然性を見つめるための貴重なメディアが土である。つまり土は『いのちの墓場』であり、同時に『いのちの養育場』なのであるが、そのことを魂の深層で納得している人と、そうでない人の精神の落ち着きには、きっと大きなへだたりがあることだろう」⁴⁷⁾と。

このようにして自然体としての自己を取り戻すことができれば、その人は、自然体のなかに眠る潜在的な能力を最大限に発揮できるようになる。映画監督の龍村 仁さんは、『ガイア・シンフォニー』という映画のなかで、深海100メートルまで素潜りをした記録をもつジャック・マイヨールを登場させている。龍村さんによれば、魚は脈拍を格段に落とすことで、深海での生活に適応している。これにたいして自意識が過剰な人間は、潜るほどに緊張を高め、脈拍数を増やしてしまうため、酸素不足に陥り、10メートルも潜ることができない。ところがマイヨールのばあい、「普段毎分60回である脈拍数は、水深100メートルのあたりでは、毎分30回に落ちている。圧縮されて働かなくなった肺にかわって肝臓や脾臓から直接に脳や心臓にむかって、不必要な場所に残っている赤血球を送りこむ血流が生まれている。活性化した細胞や組織が『私』の意識を通過せずに、自然に、生き続けるための最大限の力を発揮している」と。深く潜るコツは、過剰な自意識から自己を解放し、自然（＝魚）の摂理に同化することなのだ。⁴⁸⁾

(3)「菜園家族」の体験をとおして、自然の恵みへの感謝の心を育てる

自然のなかで自己と深く対話する空間を持つことは、「深我」を取り戻すための重要な一歩ではあるが、それだけでは十分とはいえない。「生きるということは、いのちの移し変えである」という真実を外から観察するにとどまらず、この「いのちの移し変え」のプロセス自体に参画するほうが、はるかに多くのことを学べるからである。

近代資本主義のもとで大都会の生活を送っていると、生き物を「死に物」とみなし、農業と工業と同一視したり、人間を「人材」とみなし、時間をマネーと等置する思考に染められていく。「農業と工業」、「農村と都市」との間の分業、「構想と実行」「生産者と消費者」「料理する人と食べる人」「公害の加害地域と被害地域」「戦争の指揮者と前線で戦う兵士」との固定的な分離は、真実の総体を認識する上での深刻な障害となり、幾多の紛争を生み出す元凶となってきた。

これらすでに形成され、固定されてしまった「分離・分業」を全面的に廃止し、前近代以前の自給自足時代に戻ることは不可能だし、得策でもない。ただしたとえば農業の分野に対象をしぼって、消費者（都市住民）が同時に生産者となる「家庭菜園」促進プログラムを設けることができれば、かりに農業の労働生産性が多少低くなるとしても⁴⁹⁾、「平和な健康人」を形成するうえで大きな役割をはたすと思われる。

じっさい欧州の都市近郊にいけば、「農業を趣味とする都市住民」が開いた家庭菜園が延々と続くという情景が常態化している。私のばあい、琵琶湖の西の比良山麓に肥沃な畑を借りて、妻とともに農業体験に励んでいるのであるが、10坪程度の土地であっても丹精こめて耕作すれば、野菜は十分に自給できる。

すべての個人に生存権を保障するには、①生存のために最低限必要な貨幣所得を個人に無条件に保障する「市民所得保障制度」を創設するだけでなく、②個々人に「母なる大地」に回帰する権利も保障し、希望者には食料自給を可能にするだけの農地を与える措置をとるべきであろう。この措置によって、自然の力を健康な家族関係、健康な地域社会づくりのパワーに変えていくことができるだけでなく、市民所得保障制度のための財政負担を減らすことができる。

菜園家族を形成することは、生存権を保障するだけでなく、「人の心を穏やかにし」、「平和な健康人」を形成するうえでも大きな役割をはたすだろう⁵⁰⁾。たとえばフィリピン随一の砂糖プランテーション地帯のネグロス島で、1991年頃からマオイスト（毛沢東主義者）ゲリラの指導した土地闘争を観察してきた大橋成子さんは、こう語っている。「『土地』を獲得してもすぐには農業はできなかった」。最大の理由は、資金や技術不足ではなく、「仕事は賃金をもらって言われたことだけをやる」、「困れば地主に借金」という砂糖労働者特有の「依存の文化」であった。「破産した農民は一夜にして労働者になれるが、労働者は一夜にして農民にはなれない」。

「労働者の顔」（中西五洲さん風にいえば「雇われ者根性」⁵¹⁾）を捨てて、「農民の心」を取り戻すきっかけとなったのは、大地の自然循環に^そ副い、家族・地域にとって不可欠な必需作物の栽培に切り替えてからであった。野菜を軸とする地

域循環重視の有機農業をはじめから「借金もなくなった。体は疲れるけど、心が穏やかになった。前はよく喧嘩していたお父ちゃんとも、毎日一緒に畑で汗をかくから仲良くなったよ。」「土地は……闘争でしか獲得できないかもしれないが、土を作り農を営むということは、心を平和にしなければならない。」「抑圧的なプランテーション型の砂糖栽培から解放され、農民が自己決定権を持つ農業というのは、こんなに平和なことなのか」と大橋さんは述懐されている。⁵²⁾「都会の銀行に預金がある安心感とは質の違う、大地に生かされているという根源的な安心感」（きくち ゆみ）が、ここにはあるからであろう。

このような新しいタイプの（伝統的な兼業農民とは異なる）菜園家族の形成は、「あなたいる、ゆえに我あり」の視点にたつ「自然のミレニウム」をささえる新しい人間発達像——小我から深我をへて、大我にいたる新しい人間発達の哲学の形成と普及に大きな役割をはたすであろう。

近代資本主義の歴史のなかではびこってきた「人間（個人脳）中心」主義と「自然の征服」、「大量生産・大量廃棄」という人生哲学をくつがえし、「自然のミレニウム」を支える新たな「平和の哲学」を形成するうえで、世界各地に伝承されてきた「アニミズム」にもとづく自然観は示唆的である。

たとえば——南アフリカのナミブ砂漠のブッシュマン（原住民）たちが狩に使う弓は、射程距離が20-30メートルしかない。彼らはあえて「弱い弓」しか製作しないのだ。その理由について、映画監督の龍村 仁さんはこう書いている。

「狩に出て大きな鹿の群れと出会った時、どの『個体』が彼らに生命を与えるのかは、鹿のほうから教えてくれる、と彼らは言う。だから決して、今射てはいけない個体、すなわち妊娠中のメスや子育て中の母、群れに必要なリーダーなどは射たない。彼らが鹿を獲るのではなく、鹿のほうに彼らに生命を分かち与えてくれるのだから。

弱い弓で射られた大きな鹿は、決してその場では倒れない。矢じりの先に塗られた昆虫の毒が全身にまわって力尽きるまで何日もかかる。その間、ブッシュマンの狩人たちは根気よく追跡し続ける。……時には、家族のいる部落から

何百キロも離れることもある。水も食料も持たず、灼熱の太陽の下で、何百キロもの追跡を続けることは、狩人たちにとっても命がけの営みとなる。この追跡は、『生命を与える者』と『与えられる者』との……過酷で神聖な儀式である。……そして、『与える者』が『与えること』を心から受け入れた時、この儀式は終わる。だから彼らは、倒された鹿の肉体を一片たりとも無駄にはしない。肉は食べ物になり、皮は衣服、骨は矢じりや針、スジは糸になり、もう一度、別の生命を生きるのだ。』

「すべての生命が、外から生命をもらい、外へ還元してゆく、というつながりの中で輪になって生きている。『道具』を著しく進歩させた人間だけが、そのことを忘れかけている。数万年もの間、道具を進歩させなかった生き方のなかに、自然の調和をとりもどす偉大な叡智が隠されている」と、龍村さんは結んでいる。⁵³⁾

沖縄八重山群島の竹富島にも、かつてよく似た慣習があった。樹木の乏しい竹富の島民が家を建て替えようとすれば、隣の西表島^{いりおもて}にいき、そこに自生する樹木を切り倒す以外になかった。切り倒す前夜、一家の主は樹木の前でふんどし一枚になって、「私の一家はこんなに貧しく、どうしても新しい家がある。すまないが、あなたの命をいただけないか」と涙を流して踊るという儀式を行ってきた。そして「そこまで望むのならば」と、樹木のほうが「その気になった」ことを確認してから、切り倒してきたという。⁵⁴⁾

これら原住民が育んできた伝統を、大学の教育プログラムのなかで再体験させようとする実践がある。大切に飼育してきた動物を殺して食べることで、「いのちへの感謝」を学ぼうと呼びかける村井淳志さん（金沢大学）の実践である。

教材は若鶏。「きちんと押さえないと暴れます。一気に血液が出るように切ってください。死ぬのにストレスがあると肉質が落ちます」というアドバイスをうけて、学生たちは恐る恐る包丁を鶏ののど元に近づけるが、なかなか実行できない。引きつった顔で、ようやく頸動脈を切断した。血がほとばしり、鶏の体温が下がり、脈が弱くなる。湯につけて毛をむしり、解体する。そ

の後、学生たちは、から揚げ、鳥皮の炒め物などの料理を口にする。「殺したからには無駄なく食べてあげることが礼儀」、「私たちは無数の命の上に成り立っている、生きるとは命から命のバトンタッチなのだ」、「いただきたいのちの重みを考えたら、過食はいのちへの冒涇だ」、「腹八分目で医者いらず」といった真実を深く体得するには、消費者が家畜の飼育と屠殺にも携わるという「プロシューマー」⁵⁵⁾（消費者が生産者を兼ねる）体験をすることが不可欠なのである。

主流派経済学の「ビリヤードの玉」型人間観に立つかぎり、「生き残りたいならば、頑張れ」と説くことはできても、「頑張れることに感謝できる人になれ」と説くことはできない。まず子どもたちに無条件に生存権を与え、またじっさいに自然と社会の愛情を注ぎ込めるような社会と家族のシステムをつくりあげることが大切だ。そうすると子どもの間では、恩恵にたいする感謝の気持ちが自然と生まれ、「お返し」のための奉仕活動を自発的に展開していくであろう。まことに「感謝こそが人の心を大きく、美しく、強くする」のであって、このプロセスこそが、子どもたちの心に宿った「小我」を「大我」に変えていく根源的な力となるにちがいない。⁵⁶⁾

(4) 「システム思考」のできる人となる

近代経済学の間観にもとづけば、暴力や戦争などの「悪行」は個人がなした自己決定の所産であるから、個人責任を追及し、処罰すれば事足りるとする傾向がある。しかしこのような個人主義的アプローチは、じっさいには「憎悪と暴力の悪循環」を強めるだけであろう。戦争や環境といった地球的な問題群にとりくむばあい、「木を見て森を見ない」という「個人主義的アプローチ」ではなく、「森から木を見ていく」という「システム・アプローチ」（弁証法的な思考法）をとることが、いかに重要であるかを、環境ジャーナリストの枝廣淳子さんは強調している。何か問題がおこっても、「あなたが悪い」「あいつの責任よ」「世間が悪い」「あの出来事のせいだ」と、特定の個人や個別の事象に責任を帰するのではなく、「問題がおこるのは、システム（構造）のせいだ。だから、たとえ人が交代しても構造が同じならば、同じ問題がおこる」と考え

ることのできる人を増やしていくことが大切なのである。

南アフリカではアパルトヘイト犯罪の解決をめざして、デスモンド・ツツ大司教をチーフにして「真実和解委員会」が設立されたが、この委員会が採用したのも、この「システム・アプローチ」であった。数十万人が殺されたこの歴史的悲劇の真実の全側面を明らかにし、二度と悲劇を繰り返させないというのが、「真実和解委員会」の目標とされた。そのために①黒人解放運動の内部で犯された暴力事件や腐敗事件の真相も解明する、②国家権力の命令をうけて拷問や虐殺に加わった者は、「真実を語り」真相究明に協力するならば、免罪するという方針がとられた。「罪を憎んで人を憎まず」という格言があるが、「人を攻撃せずに、問題・システムを攻撃」し、「くずれぬ平和」を作り出していくカギが、システム思考なのである。⁵⁷⁾

(5) 自他分離の克服めざす「場」の質を高める

人間とは進化の系統樹でいうと、先端部の葉っぱのようなものであるが、個人としての人間は、卵のような存在にたとえることができる。新鮮な生卵を割ると、黄身と白身に分かれる。フライパンのうえで、何個かの卵を割ると、フライパンという場が十分に滑らかであれば、黄身の部分は、独立性を保っているが、黄身を支える白身の部分が溶け合って、一つになってしまう。人間も同じであって体と心からできている。体は黄身で心は白身にあたる。心とは「交流するための判断のしくみ」であり、「温かい交流を行うための潤滑油」にほかならないからだ。体だけをみていると、個人個人まったく別ものに見えるが、心が正常に発達してくると「温かい交流のできる人間」に成長できる。⁵⁸⁾「魂水準で世界をみると、すべてつながっていることが観えてくる」からである。⁶⁰⁾そのためには、白身のように滑らかで潤いのある心を育てなければならない。みずみずしい心を創るためには、何が必要なのだろうか。

第1に白身にもっと水分を補給することだ。そのためには、もっと「涙を流すことのできる賢い体」を日本の男性はとりもどす必要がある。自らの体験と生活に即した対話を行えば、あるいは自爆に走るパレスチナ民衆の悲劇を目に

すれば、涙が出てくるのは自然なこと。かつて親鸞が『歎異抄』のなかで「末法の世に生まれた如来の弟子たちよ、悲泣すべきである」と説いたように、「悲泣する心」をとりもどすことが必要だ。「憎しみは人を壊すけれど、悲しみは人を壊さない」という。憎しみを深い悲しみ（慈悲）に転換していくには、大量の涙が必要となるのであろう。⁶¹⁾

第2に、対話の前には、母なる地球の大地を両足で踏みつけて踊るダンスや合唱、演劇をすることが効果的である。沖縄の人たちが好む「エイサー」や足を踏み鳴らすスペインのフラメンコ・ダンスなどは、自他分離を克服し、トランス状態に入るうえで効果的だ。米国南部のハイランダー民衆学校やその原型となったデンマークの民衆学校では、スクウェア・ダンスと合唱をして、その後に対話のワークショップに移ることが普通だった。当時の民衆学校は「まず生きいきして、ついで賢くなろう」という標語を掲げていた。⁶²⁾

第3に、自身が混ざりやすくするために「場（フライパン）」の質を高めることも大切だ。大地の祖霊が息づいている沖縄のウタキ〈聖域〉のような場所、あるいは被爆記念日の広島・長崎の地を舞台にしてワークショップを行うことができる、効果的であろう。

(6) 財の本来の固有価値を見抜く力を育てる

灰谷健次郎さんは、『太陽の子』という小説のなかで登場人物に「むかしはくだらんものに凝ったな……人間のくらしに必要なものとそうでないものととの区別がつかなんだ。それがわからん人間はわやになるね。沖縄の人はえらいね。そこがちゃんとしとるさかい、人間の中でも上等が多い」と語らせているが、「人間のくらしに必要なもの」とはなんだろうか。この問いに答えるには、科学の智慧・人類の叡智でもって答える以外にない。

その1つのヒントを日系カナダ人のディヴィッド・スズキが与えてくれる。1992年にリオ・デジャネイロで開かれた地球サミット総会の席上、子ども代表として演説したセヴァン・カリス・スズキの父親だ。人類の生命を支える根源的な要素として、古代ギリシア人の強調した4要素——①空気（風）、②水、

③土壌（食料）、④火（エネルギー）のほかに、彼は、⑤生物の多様性、⑥愛（家族とコミュニティを担い手とする）という2つの要素をあげ、これら6要素の均衡ある存在が決定的に重要だとしている。⁶³⁾これらの6要素は、生命の尊厳（人権）の基盤であり、基本的な人間的欲求であり、もっとも重要な「サブスタンス」（個体とその集団が生命を維持し、本来性を発現し、類として永続しうるための諸条件の総体⁶⁴⁾）なのだ。単純に商品視して、市場に任せてはならない。

(7) マネーと市場を善用する力を育てる

マネーとは、電気エネルギーのようなものである。電気を暴走させると、稲妻という形をとって人間を襲いかかり傷つけるが、電気エネルギーを適切に手なずけることができれば、蛍光灯のなかの光に姿を変え、人の役に立つこともできる。作家の司馬遼太郎も同様の見地にたって、次のように書いた。「商利や生産上の利益は、元来が薬効をもつ毒物のようなものである。息せき切って、それを追求すれば、毒に冒されて人格がこわれかねない。また使っている人間たちを利益追求のために鞭打つようなことをした場合、当人も使用人も精神まで卑しくなってしまう」⁶⁵⁾と。

とくに不況の時期になると、市場競争は適切に管理しないと、下向きの競争となり、害悪の源泉となってしまう。下向き競争を防止するために、1930年代のニューディール改革の経験からもっと学ぶ必要がある。労働運動のリーダーであった中西五洲さんは、こう書いている。「仕事が減っている業界では、談合は企業の生死に関わる問題ですから……ワークシェアリングとして公正にオープンにすべきだと思います。これを取り締まることができるでしょうか。遭難した人たちが、食べ物、水などを分け合い、励ましあって生き延びるのを非難できるでしょうか。あえてそれを非難しているのが、小泉改革なのです」⁶⁶⁾と。社会的弱者の集中しているタクシー業界はじめ、構造不況業界においては不況カルテルを公認し、下向き競争を規制していく措置が必要だし、原点に帰って労働組合を強めていく必要がある。

ディープ・ピースの世界へ

なぜ人を殺してはいけないのだろうか。新古典派経済学の間人観にたつたばあい、「自分が殺されるのは嫌だから、他人を殺してはいけない」という答えに到達するのが精一杯であろう。手の全体を見ず、指先だけからなりたっている狭い・表面的な世界だけを見ているからである。これにたいして、手の全体を観察するナチュラリストは、異なる答えを出すであろう。すなわち「他人を殺すということは、自分を殺すことでもあるから、殺してはいけない。いや殺せるわけがない」と。

中世欧州の詩人ジョン・ダンも、次のような美しい詩を残している。「誰も、それ自身完全な離れ小島ではない。すべての人間は大陸の一部、本土の一部である。もし土くれが海によって洗い流されると、ヨーロッパはそれだけ少なくなる。それが岬であろうと、あなたの友人の領地であろうと、同じである。いかなる人の死もまた、私を減少させる。なぜならば、私は人類と連帯しているからである。それ故に、弔いの鐘が誰のために鳴っているのかを知るために、人を遣わす必要はない。それはあなたのために、鳴っているのだ。」ファッシュムと闘ったスペイン市民戦争を描いたヘミングウェイの小説『誰がために鐘は鳴る』は、この詩に由来する。

5. ディープ・ピースを支える社会経済システム

「人々の中に行き 人々と共に住み 人々を愛し 人々から学びなさい
人々が知っていることから始め 人々が持っているものの上に築きなさい
しかし本当にすぐれた指導者が仕事をしたときは その仕事が完成したとき
人々はこう言うでしょう 我々がこれをやったのだと」

(晏陽初, 中国の地域教育家⁶⁷⁾)

「いちばん大切なものは みな ただ
太陽の光 野や山の緑 雨や川の水 朝夕の挨拶……そして母の愛」

(河野 進, 詩人)

スペイン北西部には、孤児たちを集めた「ベンボスタ子ども共和国」がある。⁶⁸⁾ ベンボスタ子どもサーカス団のもっとも人気のある出し物は、「強いものが下に、弱いものが上に、こどもがてっぺんに」という掛け声とともに作りだす人間ピラミッドだ。現存の「弱いものが下に、強いものが上に、もっとも強いものが頂点にくるような人間ピラミッド」をどのようにして、もっと健康で平和な人間ピラミッドにくみなおしたらよいのか。

平和を生み出す市場経済のありかた——アダム・スミスとケインズに学ぶ

一定の条件の備わった市場経済は道徳律を破壊しないことを証明することで、市場経済に批判的であったキリスト教会を説得すること——これが、アダム・スミスが『国富論』を書いた重要な動機であった。その一定の条件とは何か。①独占がなく、企業には機会均等、公正な競争が保障されていること、②資本の所有者と経営者とが一致しており、資本が地域経済と密着していること、③市場外に及ぼしているコスト（外部不経済）は、すべて内部化され、生産コストに算入されていること、である。このような条件があれば、平等互惠の商取引が行われ、資本家は地域経済の発展にも責任を感じることになるし、公害問題もおこらないであろう。⁶⁹⁾ しかしその後資本主義は巨大な発展を遂げた。今日の市場経済は、アダム・スミスが設けた条件を踏みにじて展開されることが多い。アダム・スミスの設けた条件を、どのように創造的に復活させたらよいのかを考える必要がある。

市場経済を制御する必要を唱えたケインズの提言からも、学ぶべきことは多い。1920年代に投機マネーを国際的に野放しにしたため、未曾有の「バブル経済」が生まれ、大恐慌と戦争をもたらしたことを反省して、ケインズはつぎのように述べたことがある。「私は、国と国との経済関係をできるだけ増やそうとする人より、減らそうとする人の方に共感する。思想・知識・芸術・理解・旅といったものは、本質的に国境に縛られるべきものではないが、モノについては無理のない範囲で国産のものを使うべきだし、何よりも金融を国内にとどめるべきだ」と。⁷⁰⁾ 彼の提言を受けて、戦後、投機マネーを国家的に管理し、生

産的な投資に導くための施策が講じられるようになった。

これらの点をふまえたうえで、私はつぎのような改革案を公にしている⁷¹⁾。以下、そのエッセンスを紹介しよう。

平和なエコ・エコノミーへの改革案

1. 経済価値と倫理的価値の接近・融合のために

(1)従来型の生産性の定義（労働の生産性）ではなく、もう一つの定義（資源の生産性）のほうを政策的に重視する方向で、国民合意を形成する。

(2)市場内の経済活動のもたらす市場外への波及効果——社会的・政治的・文化的・エコロジックのコストと便益とをトータルに測定・評価する手法を開発するとともに、GDPに変わる「真の豊かさ指標」ないし「総合的進歩指標」を作成・公表し、これにもとづいて、企業・公的部門の政策と業績を総合的に評価できるしくみをつくる。

2. 税制改革——税源の重心を資本・労働の果実から、人間を作り出す命の源たる地球共有・伝承財の利用行為のほうに移し、「大自然の子」としての人類が、「自らを生み出す根源」への敬虔で節度ある態度を取り戻す方向に誘導する

(1)消費税を廃止し、ぜいたく品を対象にした奢侈品税のほかに、化石エネルギー・処女資源を対象にする環境（再生不能資源利用）税を創設する。諸外国とも連携しつつ環境税の税率を毎年5%ずつ引き上げ、20年後には100%の税率を課すことをめざす。

(2)市場競争における「機会の均等」を明確にするために相続税の累進税率を引き上げる。相続額の上限（たとえば1人5000万円、ただし自営業の相続のばあいには特例を設ける）を定め、それ以上の相続財産はNPOに寄付するか、国庫に収納する。「1世代個人主義」の精神を明確化することで、蓄積された貯蓄が消費にまわりやすい仕組みをつくる。

(3)企業活動の利潤（投機を除く）への課税を大幅に軽減し、「持続可能な資源循環型経済」づくりをめざす創意ある企業活動を奨励する。

3. 人間の尊厳と発達を支える社会保障制度と大地保障制度

(1)日本住民(定住外国人もふくむ)にたいして、一定の市民的義務の遂行(たとえばボランティア活動や統治活動への参加など、予約もふくむ)を条件に市民的尊厳を支える最低生存保障=「市民所得」保障制度⁷²⁾を設ける。幼児もふくめて個人単位に年齢別に年間60万—100万円を支給し、それ以外の社会保障制度は、高額医療保険、障害者手当、(地震)災害補償制度などを除いて原則として廃止する。財源には、環境税と相続税をあて、天と祖先の恵みは、個人の市民的自立の基盤形成に用いることを明確にする。

(2)大地から切り離された巨大都市の形成を抑制し、大地・農業から切り離されてきた住民家族が、家庭菜園をもてるようにする制度をつくる。

4. 労働時間の短縮による雇用の創出

(1)①無償のサービス残業を禁止するとともに、②残業労働への割増賃金率を大幅に引き上げることで企業の残業依存体質を改めさせ、新規雇用を促進する。

(2)そのうえでオランダのようにフルタイムとパートタイムとの完全な同権を確立し、パート化を推進して、雇用を増やす⁷³⁾。また人材派遣業は、労働組合などの非営利団体に制限し、人材派遣業から出発したという歴史の原点をふまえた労働組合の発展を支援する。

5. 紛争予防・平和創出型の地域づくり・仕事おこしを促進する

「良心的兵役拒否国家」としての平和創出のための代替奉仕として、自衛隊の一部を災害救助隊に転換するとともに、自衛隊予算をくみかえて、数万人規模の青年国際災害救助隊・人道支援隊を創設し、海外に派遣する。

6. 賃金・人権・環境水準の最底辺への競争を抑える国際的しくみの開発

(1)①人間が作り出すモノ(労働生産物)、②人間が作り出せないモノ(人間を作り出す命の源)、③両者の中間領域(生命の維持・発達に直結する労働活動)を区別し、②③については、①と同一基準では、自由貿易の対象にはならないという新しい貿易ルールをつくる。

(2)進んだ賃金・人権・環境基準を設定した国が不利にならない関税調整制度

をつくる。世界的な地球市民ミニマムの人権・環境基準の年次改善計画を設定し、これにみあう途上国の保護政策を承認する。

(3)人間と財貨の国際輸送運賃については重量あたり同額を原則にし、物流よりも、人の移動、文化・情報・運動の交流の方を促進するようにする。

(4)国際通貨基金（IMF）、世界銀行、世界貿易機構（WTO）の廃止、国連の下での民主的な新制度の創設

(5)脱税マネーの温床となっているタックスヘイブンの一斉閉鎖にふみきる。

7. 軍事力・経済要素の国際移動にたいするグローバル・ガバナンスの強化

(1)①国際交通機関の燃料にたいして炭素税ないし環境税をかける、②為替取引に0.5%を課税するトービン税の国際的創設、③武器貿易の禁止をめざし、当面は武器貿易には重税を課する、④宇宙への兵器と核物質配備を禁止するとともに、軍事偵察と諜報目的の宇宙利用、宇宙空間の商業利用に課税する。

(2)以上の財源を国連強化に役立てるとともに、国連のグローバル・ガバナンス機能を強化し、地球規模での格差是正、所得の再配分に役立てる。

(3)特許権・著作権重視の知的財産権戦略の発動に制限をくわえ、地球公共財としての科学技術・文化情報の流通の自由を促進する措置をとる。

(4)世界人口の安定化につとめるとともに、難民・外国人労働者の公正で秩序ある受け入れを促進する。長期ないし永住外国人については市民的権利を認める。

8. 国家の民主化とアジアとの和解——日本史上初の「国民（市民）国家」をつくる

(1)「宇宙一情報覇権国家」米国の覇権主義に反対し、安保体制から離脱し、非同盟中立の「良心的兵役拒否国家」の道にふみだす。

(2)かつての天皇制国家の犯した侵略戦争責任を認め、戦争犠牲者の個人補償をおこなう。

(3)欧州連合の先例に学び、APT 諸国（アセアン・プラス・日本 中国 韓国）のあいだで共通の通貨・金融同盟を結び、紛争・戦争の起こりにくい「内臓のつながったような東アジア経済圏」をつくる。

おわりに

見られるように、この改革案は、反市場主義・反企業主義の立場には立っていないし、公共部門の存在意義と責任を不問にする反国家主義の立場もとっていない。そうではなく市場、国家、市民社会の3つの領域に委ねるべき固有の任務を明確にし、どれか1つが暴走しないように相互にチェックしあうように促し、適切なバランスをとることを重視している。そのうえで個々人が、自らを生み出してくれた「いのち」の根源（大自然と社会を貫くいのちの流れ）に向きあい、「エコロジカルな自覚をもつ1世代シングル⁷⁴⁾」に成長していけるように経済基盤を整えようとしたのである。

昔、世界の諸民族は、収穫の秋には、自らの勤労の成果を、母なる大地・大自然・祖先に献上し、大自然と社会・祖先からいただいた「大いなる無償の恵み」に感謝する祭事を行った。そしてそのお供え物は、祭りごとの後には共同体成員にできるだけ公正に分かち合ってきた。このしきたりを、21世紀に創造的に復活させる試みだといってもよい。

どうか論評していただきたい。こんごも経済民主主義とナチュラルリストの立場にたって、平和のための経済システムづくりの道を探究していきたいと思う。

注

- 1) 内山節『市場経済を組み替える』1999年、農文協、211ページより。
- 2) 詳細は、藤岡惇『グローバリゼーションと戦争』2004年、大月書店。
- 3) 『朝日新聞』1995年8月3日「ひと」欄に掲載された直野章子さんの言葉。11年前に彼女とともに始めた日米学生の本爆学習プログラムは、アメリカン大学と立命館大学共同企画の教学プログラムに発展して今日に至っている。
- 4) 松尾雅嗣「安全保障と平和」『人間の安全保障論の再検討』広島大学平和科学研究センター研究報告31号、3ページ、2003年ガルトウングの平和学の今日的な到達点については、『トランセンド研究——平和的手段による紛争の転換』第2巻、2004年5月、トランセンド研究会、1-41ページ参照。

- 5) 国連の『人間開発報告書1994年版』、マブール・ハク『人間開発戦略——共生への挑戦』日本評論社、1997年を参照。
- 6) この転換の智慧袋となったのが、インド出身の経済学者のアマルチア・センである。武者小路公秀「グローバル下の開発と安全政策」『軍縮問題資料』210号、98年4月、2-9ページ。石川捷治「国際連合『人間の安全保障』論の意義と問題点」『日本の科学者』39-9、2004年9月号、36ページも参照。
- 7) その背景には、二〇世紀の前半に二度の世界戦争と大恐慌の惨事の体験をとおして、市場の暴走（恐慌）や国家の暴走（戦争）を規制しようという運動が、未曾有の盛り上がりを示したことがある。その結果、国際連合が形成され、「古典的な帝国主義」時代を律してきた国際関係のルールに一定の修正が施されるとともに、植民地主義の崩壊と符節をあわせて「修正帝国主義」のシステムが形成された。内政面でも一定の変化が生まれ、市場の失敗（大恐慌）を繰り返さないために、労働組合が公認され、完全雇用法が制定され、福祉政策が拡充された。このように19世紀型のむきだしの資本主義システムは、いくつかの点で修正され、福祉国家的要素をかかえる「修正資本主義」の体制が構築され、「資本主義の黄金期」を支えたわけである。藤岡惇『グローバリゼーションと戦争』2004年、大月書店、17-22ページを参照。
- 8) 基礎経済科学研究所編『人間開発の経済学』1982年、青木書店。基礎経済科学研究所編『人間開発の政治経済学』1994年、青木書店。
- 9) これまでの到達点への私の批判的コメントは、藤岡惇「近代個人主義の人間観をどう超えるか」『経済科学通信』78号、1995年4月、60-64ページ、藤岡惇「エゴからエコへ——「自己」の拡張と人間の発達」『経済科学通信』93号、2000年4月、58-66ページ。
- 10) ガンジー（蠟山芳郎訳）『ガンジー自伝』中公文庫、201ページ、五島茂責任編集『ラスキン・モリス』（中公パックス世界の名著第52巻）中央公論社、1979年、63・78ページ。
- 11) 佐治晴夫『宇宙の風に聴く一君たちは、星のかけらだよ』1994年、かたつむり社、44ページ。青木和光『物質の宇宙史』2004年、新日本出版社。
- 12) 小貫雅男・伊藤恵子『森と海を結ぶ菜園家族』2004年、人文書院、193ページ。
- 13) ウイリアム・クラーク『死はなぜ進化したか』1997年、三田出版会。田沼靖一『死の起源——遺伝子からの問いかけ』2001年、朝日新聞社、26-27ページ。
- 14) 「36億年の歴史を持つDNAの発する強い力と、たかだか数万年の歴史しか持たない自我との間の葛藤に苦しんでいるのが人間です」（柳澤桂子『意識の進化とDNA』地涌社、1991年、6ページ）。
- 15) ハーヴィー・ダイヤモンドほか『ライフスタイル革命——私たちの健康と幸福と

- 地球のために』1999年, 63・66ページ。村上和雄『サムシング・グレート—大自然の見えざる力』1999年, サンマーク出版, 136ページ。
- 16) 諸富祥彦, 『生きていくことの意味』PHP新書, 2001年, 53-65ページ。諸富祥彦『どんな時も人生にYESを言う』1999年, 大和出版, 124-131ページ。
- 17) アンドレ・ランガネーほか『人類のいちばん美しい物語』2002年, 筑摩書房, 参照。
- 18) フリードリッヒ・エンゲルス「自然弁証法」邦訳『マルクス・エンゲルス全集』, 20巻, 352・358・492ページ。ただし, 訳文の一部を改めた。
- 19) スチュアート・カウフマン (米沢富美子監訳)『自己組織化と進化の論理』1999年, 日本経済新聞社, 16-17, 24, 35ページ。
- 20) 今日, 進んでいる宇宙観・自然観の革命的な変化は, 弁証法的な唯物論哲学を発展させる好機であるが, それに失敗すれば新たな観念論と神秘主義, 迷信やオカルトの類を生み出す危険がある。百年前に同様の危機に直面してレーニンが, こう書いていた。「新しい物理学が観念論にまよいこんだのは, ……物理学者が弁証法を知らなかったからであった。……今日の『物理学的』観念論は……自然科学者の一学派が, 形而上学的唯物論から弁証法的唯物論へまっすぐにすぐさまのぼることができなかつたので, 反動哲学へ転落したことを意味するにすぎない。……現代物理学は産褥にある。それは弁証法的唯物論を産もうとしている。」レーニン『唯物論と経験批判論』邦訳全集版14巻, 大月書店, 315・378ページ。シェリングの研究者の西川富雄さんも, 私と類似した視点にたつて「自然を主体にした哲学」を考えておられる。西川富雄『環境哲学への招待——生きている自然を哲学する』2002年, こぶし書房, 59, 86-89ページ参照。関連して山尾三省『アニミズムという希望』2000年, 野草社も参照。
- 21) モーリス・シュワルツ『モリー先生の最終講義』飛鳥新社, 1999年, 141ページ。人間と自然との関係を学生に考えてもらおうと, レオ・バスカーリア (みらいなな訳)『葉っぱのフレディー—いのちの旅』1998年, 童話屋も, 含蓄に富んだ文献である。
- 22) E. F. シューマーハー『スモール イズ ビューティフル——人間中心の経済学』講談社学術文庫, 119-126ページ。
- 23) その肯定論としては, メアリ・メラー『境界線を破る——エコ・フェミ社会主義に向かって』1993年, 新評論, プレドッティほか (寿福真美監訳)『グローバル・フェミニズム』1999年, 青木書店, などが参考になる。
- 24) Satish Kumar, No Destination: An Autobiography, 1992, pp. 79-119.
- 25) 同様の主張として, 野村佳子『いのちの世紀を啓く』2000年, 一葉社, 146ページ。

- 26) Satish Kumar, *You are, Therefore I am: Declaration of Dependence*, 2003. ただしサティシユは、第3のミレニアムになると新たな「依存宣言」の時代となると書いているが、最初の千年紀との違いを明確にするためにも「相互依存の宣言」の時代に改めたほうがよいと考える。
- 27) この点、村岡到『生存権・平等・エコロジ——連帯社会主義へのプロローグ』2003年、白順社も参照。
- 28) 松木武彦『人はなぜ戦うのか——考古学からみた戦争』2001年、講談社、12-18、24ページ。
- 29) 高木善之『地球大予測』1998年、サンマーク出版、140-141ページ。
- 30) ミミズがいるような肥沃で健康な土を一握りすれば、そのなかには60億匹の微生物が棲み、有機的な生物世界を育てている。デンマークの植林事業が示したように、まず木を植え、雨を呼びこみ、土を肥やすことは、その上に棲む動植物を健康にし、健康な人体、健康な社会関係を作っていくうえでの根本条件なのだ。アルバート・ハワード『ハワードの有機農業』上、2002年、農文協、33-34ページ。
- 31) レスター・ブラウン『エコ・エコノミー』2002年、家の光協会、27ページ。ポール・ホーケンほか『自然資本の経済——成長の限界を突破する新産業革命』2001年、日本経済新聞社。自然の本来性と職員の人間性を尊重した経営に転換することで、経済的にも大成功した最近の事例として、北海道旭川市立の旭山動物園のばあいがある。1996年には入園者26万人というところまで落ち込んだ動物園が、どうして8年後には、観客数140万人という日本一の動物園に生まれ変わったのか。動物を幸せにし、動物の本来性を最大限に引き出すことで、見物客の自然観の革新を促し、人間をハッピーにしたからである。旭山動物園の事例は「動物と人間の相互発達の経済学」を鮮やかに示している。詳細は、週刊SPA!編集部『旭山動物園の奇跡』2005年、扶桑社を参照。
- 32) たとえば、カール・ポランニイ（玉野井芳郎ほか訳）『人間の経済—市場経済の虚構性Ⅰ』岩波書店、1980年の第4章参照。
- 33) 鎌田東二・喜納昌吉『霊性のネットワーク』2000年、青弓社。
- 34) 橋本敏子『地域の力とアートエネルギー』1997年、学陽書房、7・18ページ。
- 35) 朝野賢司ほか『デンマークのユーザー・デモクラシー』2005年、新評論、その歴史的起源は、清水満『生のための学校——デンマークで生まれたフリースクールの世界』1994年、新評論の第7章を参照。
- 36) 小貫雅男・伊藤恵子『森と海を結ぶ菜園家族』2004年、人文書院、30ページ。
- 37) たとえば斎藤道雄『悩む力——べてるの家の人びと』2002年、みすず書房。
- 38) 坂本龍一編『非戦——戦争が答えではない』2002年、幻冬社。
- 39) ピースフル・トモローズ編（梶原寿訳）『われらの悲しみを平和の一步に』2004

年，岩波書店。

- 40) 戦争抵抗者同盟の新聞『ピース・ニュース』2460号，2005年4月号。トライデント・プラウシェアとは，トライデント原潜を解体して，その資源を平和産業に転換せよ，「剣を鍛ち変えて鋏（プラウシェア）に変えよ」という聖書の言葉を掲げる非暴力抵抗グループのこと。
- 41) 北インドのヒマラヤ山麓の貧しい農村の女たちは，樹木にしがみつくことで森林伐採をやめさせようとするチプロ運動を展開したが，同様の運動が日本でも始まっている。2004年4月から，沖縄の辺野古地区の沖合いで米軍の海上基地建設のための工事が始まった。工事を阻止するために，非暴力の座り込みをしている92歳のおばあさんは，「心に海が染（す）めり」と述べ，言葉を続けた。「この海の恵みで子どもたちを育ててきました。宝の海を子孫に手渡すことが私たちの努めです。皆さんの力を貸してください」と。
- 42) Hazel Henderson, *Building A Win-Win World*, 1995. 自意識過剰の神経症患者にたいして「ありのまま・自然体の自己の受容」を説く「森田療法」を提唱した森田正馬さんも，つぎのように書いている。「ある婦人が神経質性のヒポコンドリーで病床につき，今にも自分に死がやってくるものと思い，苦しんでいた。ところがある日，4歳になる自分の子が百日咳にかかり，呼吸も絶えるかと思われるばかりに咳き入るのを見て，とつぜん自分のことを忘れて子供を介抱し，そのときからはじめて自分の病気を忘れるようになった。小我へのとらわれが，わが子にたいする愛情のために消滅したのである。小我が拡大されていくありさまは，子をもつことによってはっきりと認めることができる。わが子の病気やよろこびは，わが身のことのように苦しく，またうれしいものである。子にたいするのと同じ気持ちだが，さらに進んで，兄弟，親友，教え子，隣人，同郷の人などにまで拡大され，それらの人々の苦楽を自分の苦楽とするようになるとき，自我はいよいよ大きく成長，発展していくのである。仏の慈悲は，われわれが子どもを愛するように衆生を愛するといわれるものであって，これがすなわち大我の極致である。それにたいして神経質患者は，自分の苦痛から逃れることばかりに心を労しているために，わが子も家族も犠牲にしかえりみないことがある。これが小我の執着である」と。森田正馬『生の欲望——あなたの生き方が見えてくる』1999年，白揚社。あわせてゲーリー・スナイダー『野生の実践』2000年，山と溪谷社，41・78・96・329ページも参照。
- 43) バートランド・ラッセル『幸福論』1991年，岩波文庫，273ページ。同様に司馬遼太郎も，作中人物の西郷隆盛にこう語らせている。「自分を愛することがなければ，物事がよく見えてくる……自己を忘れれば天の心にちかくなり，胸中が天真爛漫としてきて，あらゆる事や物がよく見えるようになった」と。司馬遼太郎

- 『翔ぶが如く 二』文芸春秋社。
- 44) ヴァージニア・ウルフ（川本静子訳）『自分だけの部屋』2000年，みすず書房。
 - 45) 田口ランディ『できればムカつかずに生きたい』2000年，新潮社，162ページ。
 - 46) 加島祥造『伊那谷の老子』2004年，朝日文庫，102ページ・22ページ。
 - 47) 宮迫千鶴「土の力」『読売新聞』1996年6月の記事より。
 - 48) 龍村仁『ガイア・シンフォニー間奏曲』53ページ，ジャック・マイヨール『海の記憶を求めて』1998年，翔泳社を参照。
 - 49) ロシアでは，むしろ家庭菜園の生産性のほうが，機械化された大農業よりも高いといわれる。じっさい都市住民の多くが，郊外に120-160坪程度の家庭菜園をもっている。その総数は2000万に達し，全ロシアの食料需要の実に52%を生産しているという。ジョレス・メドベージェフほか『市場社会の警告——市場社会と共生の原理』1999年，現代思潮社，51-52ページ。
 - 50) この展望は，青年マルクスの未来社会論とも重なっている。エンゲルスと共同して書いた初期の著作『ドイツ・イデオロギー』のなかで，若きマルクスは，つぎのように述べていた。「……共産主義社会にあつては，……私の気のおもむくままに，朝には狩をし，午すぎには魚をとり，夕には家畜を飼い，食後には批判をすることができる。狩人，漁師，牧者または批判家 [という専門職業人] になるという，社会的活動の固定化」は克服される，と。マルクス・エンゲルス『ドイツ・イデオロギー』邦訳全集版，第3巻，29ページ参照。また小貫雅男・伊藤恵子『森と海を結ぶ菜園家族——21世紀の未来社会論』2004年，人文書院，小貫雅男『菜園家族レポリューション』2002年，社会思想社も参照。
 - 51) 中西五洲『理想社会への道——私の資本主義改造論』2005年，同時代社，229ページ。
 - 52) 大橋成子『ネグロス・マイラブ』2005年，めこん，128-129，145-146，243ページ。
 - 53) 龍村仁『地球のささやき』1995年，創元社，23-28ページ。
 - 54) 竹富島の神司を務める新田初子さんからの聞き取り（2004年2月24日，竹富島）。現在この儀式の復活を検討していると述べておられた。
 - 55) 『朝日新聞』2002年10月19日付け。
 - 56) 立命館大学経済学部の卒業生であり，阪神大震災で被災した後，60歳にしてプロゴルファーに転身された古市忠夫さんの言葉。『りつめい』220号，2005年4月，立命館校友会参照。

ここで「大我」への道を歩む喜びを歌った2人の先哲の詩も，あわせて紹介しておこう。最初は，インドのラビンドラナート・タゴールの詩である。「私は眠り，人生は喜びだという夢をみた。私は目覚め，人生とは奉仕だと知った。私は

行動し、目をこらす。奉仕は喜びだった。」

もうひとつは、アッシジの聖フランチェスコの「平和を求める祈り」だ。「わたしをあなたの平和の道具としてお使いください。憎しみのあるところに愛を、いさかいのあるところに許しを、分裂のあるところに一致を、疑惑のあるところに信仰を、誤っているところに真理を、絶望のあるところに希望を、闇に光を、悲しみのあるところに喜びをもたらすものとしてください。慰められるよりは慰めることを、理解されるよりは理解することを、愛されるよりは愛することを、わたしが求めますように。わたしたちは、与えるから受け、ゆるすからゆるされ、自分を捨てて死に、永遠の命をいただくのですから。」近藤敏子『ヒロシマ 60年の記憶』2005年、リオン社、134ページを参照。

- 57) 山本浩『真実と和解——ネルソン・マンデラ最後の闘い』1999年、日本放送出版協会。
- 58) 清水博『場の思想』2003年、東大出版会、21-23・40・50ページ。
- 59) 石田勝正『心って何だろう』2000年、麗澤大学出版会。
- 60) 伊田広行『スピリチュアル・シングル宣言——生き方と社会運動の新しい原理を求めて』2003年、明石書店。
- 61) 田口ランディ、前掲書、311ページ。
- 62) 清水満『共感する心、表現する身体——美的経験を大切に』1998年、新評論、129-137ページ。また「中つ火」を囲み、全身で傾聴することを強調する中野民夫『ワークショップ——新しい学びと創造の場』2001年、岩波新書、4-7ページも啓発的である。
- 63) ディヴィッド・スズキ『生命の聖なるバランス』2004年、日本教文社。
- 64) 戸崎 純・横山正樹『環境を平和学する——持続可能な開発からサブシステム志向へ』2003年、法律文化社。
- 65) 司馬遼太郎『人間というもの』1998年、PHP 研究所、50ページ。また福田秀樹『日本ってお金に復讐されてるの』2002年、中経出版も示唆に富む。
- 66) 中西五洲『理想社会への道』2005年、同時代社、106ページ。
- 67) 宋 恩栄『曇陽初一—その平民教育と郷村建設』2000年、農山漁村文化協会、色平哲郎さんに教えていただいた。
- 68) 本橋成一『サーカスの詩——ベンボスタの子どもたち』1993年、影書房。
- 69) デビッド・コーテン『グローバル経済という怪物』1997年、シュブリンガー東京、94-99ページ。
- 70) 同上書、387ページ。
- 71) 藤岡惇「持続可能な日本づくりのアジェンダの提案」森岡孝二ほか編『二一世紀の経済社会システムを構想する』2001年、桜井書店。関連して、ジェームズ・ロ

バートソン（石見尚訳）『21世紀の経済システム展望』1999年，日本経済評論社も参照されたい。

- 72) 小沢修司『福祉社会と社会保障改革——ベーシック・インカム構想の新地平』2002年，高菅出版。この構想の社会思想史的な背景を知るには，トニー・フィッツパトリック『自由と保障——ベーシック・インカム論争』2005年，勁草書房が有益である。
- 73) 長坂寿久『オランダモデル』2000年，日本経済新聞社。
- 74) 伊田広行『スピリチュアル・シングル宣言』2003年，明石書店。

（注記：本稿は藤岡 惇「ディープ・ピース」（池上 惇・二宮厚美編『人間発達と公共性の経済学』2005年，桜井書店所収）を補充・改稿したものである。）